

小さな言葉選びも積み重ねで、自分が伝えたいこと

をどう伝えるか考えるのはすごく大事にしてる

語り手 中合真依（高校八期生） 聞き手 山瀬心遥

ひらがなの名前で活動を始めたきっかけ

―活動名はひらがななんですわね。

あ、そうそう。

―どんな意図があるんですか。

私の名前。そう、これがさ、初見でさ、名字が「なかごう」って呼んでくれたらいいねんけど、「なかあい」さんとかさ。初手で読んでもらえへんの悔しいなと思ってさ。別にカタカナでも良かったんけど、柔らかい方が好きやなと思って。「なかごう」ってあんまり苗字いいひんからさ。大学の時もアカペラサークルに入ってて、その時もあだ名を決めましたよ、ってなって。でも「まい」っていう名前は割といるから、先輩でもまいまいさんとか、同期でもまいちゃんいて。で、自分の下の名前をあだ名として言ったから、「じゃあもうひらがなでいいか」ってなって、そのままやってたんですけど。やっぱ覚えてもらいやすいし、今でもその名前で活動したいなと。すごい気に入ってるよね、自分の名前。

―いいですね。確かにひらがなの方がわかりやすいです。

高校時代の卒業論文

卒業論は、やってたよって感じ。高齢者の生きがいと社会参加の重要性についての論文で。

―なんでそれ選んだんですか。

多分、自分が将来おばあちゃんになった時に、なんもすることないなと思って、死ぬの嫌やなって思ったから。じゃあ、おばあちゃんになっても元気に自分がやりたいことをやるにはどうしたらいいんやろ、って考えるためにやったんやと思う。「こういう職業につきたい」とか「こういう人になりたい」というよりも、「どうありたいか」を考えるのが昔から好きやって。自分が「これが生きがいです」と思うものを見つけて、こういう人でありたい、って。

でも、生きがいって年を重ねたら変わっていくやん。体力も気力も変わっていくし、今は楽しいことがいっぱいあるけど、おばあちゃんになった時に何もなかったら、一人で死んでいくんかなって思った。だから多分、高校生の時から「どういうふうになを取ったらいいか」「現役世代を辞めてからどう社会と繋がっていくか」を考えてたんやと思う。家族以外の人とも繋がって生きていかんと、私は喋るの大好きやから、このままでは死んでしまう、と思って書いたんやろな（笑）。

二十代後半になって、友達の中には結婚したり家庭を持つ子もいるけど、それぞれが自分の幸せを選んでる。他人に引つ張られるんじゃなくて「これが自分の幸せかもしれん」と見つける力が大事やと思う。だから、生きがいについて考えてるんやと思う。年を重ねることを「老化」と思いたくない。頑張ってるおじいちゃんおばあちゃんを見てたら、リタイアしても社会と繋がって「ああ、生きててよかった」と思えるんちゃうかな。そう思いたかったんやと思う。

考える力を大切に

私、やっぱり考えることを諦めたくなかったんやろなと思う。今も授業受けて、感想文書いたりする授業ってあるやんな。
—ありますね。

私の記憶が間違っていなければ、高校の授業やと思うんやけど。その時に「何かを聞いたり受け取った時に、一文とか二文しか感想がないのはおかしい」って言われた。田辺先生やったかなあ、「一生懸命準備してきてくれはるものがあるのに、そこから何も感じないなんてありえへん。それは考えるのを諦めてるだけや」って。「楽しかったです」とか「勉強になりました」なんて誰でも言える。ほんまに自分の中で思ったことを書くべきで、感想欄があったら最後の行まで書け、と。

その言葉は今でも大事にして、「考えるのをやめたらあかん」って思う。どれだけデジタルが進んで効率的になっても、目の前の人がしてくれたことに感想を持って、自分の言葉にする訓練は必要やと思う。中高でそういう習慣が身について、今も文章書くの好きやし、友達にLINEするときもつい長文になって「すごいな（笑）」って言われることがある。でもそれは自分だからこそ書ける言葉があつて、それを伝えきるのが誠意やと思うから。適当に短い感想で済ませるのは真心がこもってない気がする。

興味がなくても「なんで興味がなかったのか」までは書けるやん？だから卒業から十年経った今でも、授業でも部活でも「考えて、自分で書いたり作ったりしたもの」ばっかり覚えてる。授業で何やったかは忘れてても、何かを考えた記憶は残ってる。公式なんか全然覚えてへんけど（笑）。考えることが大事やった。そういう訓練があったから大学で

も頑張れたし、今も自分の表現活動を続けられてる。「やっぱり諦めたくないな」って思う。

私は元から人前が恥ずかしいタイプやった。得意じゃないっていうタイプじゃなくて、むしろ得意なところが伸びた感じかな。だから自然と「どうやったたら目の前の人にもっと伝わるかな」って考える土台ができてたと思う。やっぱり私は十年立命館でお世話になって、考える力を身につけさせてもらったのが大きい。授業の細かい内容は忘れてしまったけど、それだけは一生残ると思う。

考えることはどんな場面でも必要やから。「今日何を着ようかな」もそう。洋服の仕事してた時はもつと考えることが多かった。暑いからこれ、寒いからこれ、じゃなくて、今のトレンド、生地の流れ、ファッションアイコンに懂れて服を選ぶ人が多いとか。そういうのを踏まえて「じゃあこういう服を提案した方がいいかな」と考えなあかん。どんな分野でも、考えることをやめたら人の言うことを聞くだけになる。お金をもらうために、とりあえず言われたことだけやる。それじゃ面白くない。考えることも大事やし、考えたことを口にするのも恥ずかしい。今思えば、それは先生たちが頑張ってくれてたからやと思う。

挑戦する環境の変化

—今の仕事のきっかけってありますか？

そうやね。今の仕事……私の仕事どういう仕事って認識してる？

—シンガーソングライター。色々書いてはりますよね。

そうそう。文章も書いて。今回の聞き書きインタビューの募集要項のところに、私は「人生で今が一番いい」と言えるかどうかであつた

んやけど、私はほんまにそう思う。どこで働いてても毎年「今が一番いい」って思う。

で、そのきっかけなんやけど。私、小学校は普通に地元に行つて、中学校もそのまま公立に上がろうと思つてたんやけど。母に連れられて個別相談に来た時、成績を見せたら「行けるかも」って言われて、立命館守山に入った。別に自分から興味があつたわけじゃなかった。小学校六年生の時、ちよつといじめられてるなつて思うことがあつて。深刻に長期的なものじゃないけど、私が嫌がつてるのを周りの友達が見て笑つてる、みたいな。その時に泣いて帰つたらしくて、それを見た母が「このまま公立に行つたら、この子の良さが削られてしまうかもしれない」と思つたらしい。それで学校を探してくれたみたい。小学生つて自分で学校選べへんやん。

立守は入つてみたら六年間、いじめとか嫌な気持ちになることがなくて、すごいびのび過ごせた。それはやつぱり誰も私を否定しなかったからやと思う。「この人はこういう人なんやな」って受け入れてくれる。先生も友達もそう。否定されないベースで育ってきたから、新しいことにもチャレンジしやすい。「どうせお金にならんやろ」「意味ないやろ」つて諦めるのは簡単やけど、そうじゃないって言ってくれたのがこの学校やと思う。小学校はふわつと過ぎただけやけど、中高の経験は自分の土台になってると感じる。授業以上に、人としてどう関わつてもらったかが大きい。坂先生や田辺先生の授業もそうやけど、それ以上に「先生も一人の人」としてどう生きてきたかに興味があつた。だから職員室に行つて世間話や昔の話を聞くのが好きやつた。

今の仕事

なんか私が今まで「どういう仕事したか」みたいなを書いてない？
—今の仕事のことかほとんどですね。

あ、そうか。ここやな、「現在の職業について」。「ネガフィルムの現像やデータ化、プリントやフィルム販売を通して、お客様の暮らしや日々の余白を彩るサポートをしています」って書いてるんやけど。

私が今までやってきた仕事は三種類あつて、大学生の時の四年間は地元の雑貨屋さんで働いてた。で、大学卒業してから三年二ヶ月は大阪・梅田でアパレルの仕事。今は写真屋さんで働いてる。やつぱり「受け入れてもらえる場所」を自分で選んでいけるんやと思う。世の中にいろんな会社があるけど、自分の考えを諦めず、目の前の人を大事にしてたら、ちゃんと導かれる場所に行ける。腐らずにやってほしいなつて思う。アパレルの職場もすごい好きやつたけど、今やってる写真屋さんの仕事は、私の人生を変えてくれたし、私のことを受け入れてもらえた場所やつた。

写真屋さんで感じたこと

私が働く今の写真屋さんはお客さんとスタッフが名前呼び合つて、最初は文化の違いにびっくりしたけど、人としてつながる関係つてあるんやつて思った。初めてお店に行つた日のこと、そこで出会った友達のこと、展示を見て感じたこと……。私はここからたくさんものをもつたから、次は自分がスタッフとして誰かに与えられる存在になりたい。同じようにここに来た人に、私が感じた気持ちを味わってほしいつて思った。アパレルでも名前でもらつて働いてたけど、この店ならもつと自分にしかできないことがあるはずやと思った。アルバイトやからつて適当にやるんじゃないくて、表現に近い場所で、自分に必要な

出会いや学びがある。フィルムを通じて集まる人たちは、写真に限らず絵や音楽とか、いろんな表現にアンテナがある人ばかりで、そういう人たちと話せるのがすごい面白いし、自分にとって大事なことやと思った。お客さんと話してみたらひとりひとり考えてることが違うのがわかるし、今働いてるお店でも、いろんなお客さんと接して、いろんな職業の人がいることを知って。社会ってこうやって助け合って成り立ってるんやなって実感できたのはすごくよかった。便利な世の中でも、目の前の人を大事にすることはやっぱり大事やなって思う。

高校時代の放課後

―放課後は何してたんですか。

放課後は部活がほとんど。曜日はあんまり覚えてないけど、毎日、ほぼ毎日行ってた。部活が終わるのは夜七時ごろで、平日も習い事をしてた。歌を習ったり、ピアノを弾いたり。当時は部活全入制でアルバイト禁止やったから、基本は部活優先で、習い事は空いてる時間に組み込む感じ。元々は生徒会執行部だけ入ろうと思ってたんやけど、母が「絵を描くのが好きなら美術部も試してみたら」と言ってくれて、週一くらいで油絵を楽しむ時間を持てたのはよかった。美術部の友達も私を理解してくれて、すごくのびのびやれた。

私はどちらかというと、一つのことに集中して取り組むより、いろんな表現を楽しみたいタイプ。カメラや歌、文章を書くことなど、ひとつに絞るより、全部を選び取りながら自分の表現にする方が自分らしいと思うてる。例えば歌を書くときは誰かを癒すことを意識したり、写真を撮るときは見た人が何かを感じ取れるようにしたり、ラジオでは自分の感性をシェアしたり。そういう活動は誰かに求められたからやっている

んじゃないくて、まずは自分で「やりたい！」と選んで続けていること。だから、私は一つのことだけでなく、いろんな表現を通して生きる自分を体現したい。その姿を、周りの人が大なり小なり受け取ってくれたら嬉しいなと思うながらやっている。

高校時代の文化祭

―文化祭の劇のこととか、今の表現関連で、どんな役割されてたかなって。

今の表現。文化祭の時の役割。え、これ私、ごめん、質問に答えればいい質問なんやけど、文化祭とか、生徒会やったらクラスの活動って、ほぼ参加できひんくない。そうでもない？

―去年の先輩だと、主役だったり。結構両立頑張ってた。

でも、文化祭の事務の時間とかは部屋にいるやんな。ってなったら、クラスの出し物にはあんまり関われへんかった。私らの時は、部員数が少なかったから、クラスにいる時間は少なかった。基本的に執行部で、インカム使って喋ったりとか、執行部はめっちゃ充実してたけど、クラスでの関わりは六年間通して薄かった。でも、高校三年生の時は、クラスに少し入れたなと思うてる。男の子と女の子三人ずつの仲良しチームに入れてもらって、誰かの誕生日には朝の時間にキーキを持ち込んでお祝いしたり。私以外の五人が書いたメッセージをアルバムでもらったりして、クラスの輪に戻りやすいように気遣ってもらえてるなって思った。私は小さい時にミュージカルをやったので、舞台や劇に出るのはすごくやりたかった。オズの魔法使いでは、序盤に出てくるおばさんの役をもらった。クラスに参加できると思ってなかったからすごく嬉しかったし、自分が頑張っていることを認めてもらえる場所があるのは大

事やったなと思う。だから今も、両立できてるなっていうのはすごくよかった。

高校時代の先生とのエピソード

海外研修行った時さ、しおり作った？

—ありました。

引率の先生が坂先生で、すごい仲良くしてもらってた。自分では全然思ってたんだけど、めっちゃこだわり屋さんで、与えられた時間の中で自分の最高のパフォーマンスをしたいタイプやった。夜中に直して送ったりして、すごく楽しかったな。坂先生が私のことを「しおりリーダー」って呼んでくれたのがすごく嬉しかった。私が中学生の時の高校執行部顧問が坂先生で、すごくのびのびやってはって、一緒に学生と頑張ろうっていう感じで見てて、私も高校生になったらここで一緒にやれるな、楽しそうと思った。坂先生も全然ネガティブなことを言わへん人で、なんでですかって聞いたら、「意識的に言わんようにしてる」って。疲れた、しんどい、めんどくさいって言う瞬間は、自分の状態を表すけど、それを聞いた人に負荷がかかることもあるから、あえてポジティブな言葉を使っているって。その結果、ポジティブな人しか周りに集まらなくなった。一緒になって同調することもできるけど、あえて聞き流して距離を取る。別の人と一緒にいることを選べば、嫌な気持ちにならへん場所に入れる。だから、自分が発する言葉が人となりを作ると思う。小さな言葉選びも積み重ねで、自分が伝えたいことをどう伝えるか考えるのはすごく大事にしてる。

結局私が高校に入学するタイミングで執行部の顧問から外れはったから部活では一緒に活動できひんかったけど、高一の時に坂先生に家庭科

を持つてもらって、高校二年生の時はシカゴ研修に連れて行ってもらったぐらいの関係性。別に部活の顧問でもなかったんやけど、卒業式の時手紙を渡してくださった。この手紙をね、奇跡的に今日忘れずに持ってきたんやけど、こうして手紙を書いてもらえるのは、人として関わってきたからやるなって思うねん。だから、いろんな面白い大人と出会って関わってほしいなって思ってます。

年齢を重ねるほど染みてくるんですよ、こういうのが。ほんとに。だから、言葉を渡したらちゃんと返してもらえると思うから、すごく大事にしてほしいなって思うね。私は手書きで書いたから、坂先生が手紙をくれるとき、なんで手書きじゃなかったのって思って、当時はもうそういうところばかり気になっちゃうんやけど（笑）。

ほんまに面白い大人はちゃんと自分の懐に入れておく。卒業しても「この人とは大人になっても喋りたいな」って思ったら、絶対答えてくれる先生ばかりやと思うし、いいなって思う人にはぜひ連絡を送ってほしいなと思うね。

野坂先生は高校三年生の時の担任で、英語の担当の先生やったんやけど、授業が中心というわけでもなく、私自身が学校行事でクラスに関わったわけでもないから、めっちゃくちや密に関わったってわけじゃなかったんやけど、卒業式のタイミングで、野坂先生が一人ひとりにメッセージカードを書いて、クラスのみんなで撮った写真を入れて、写真立てみたいにして渡してくれはったんよ。四十人弱いるクラス全員に、一人ずつ前に出たそのメッセージを読んでもらう形で渡してくれはったんやけど、他の友達は「体育祭でこんな活躍しましたね」とか「クラスでこういうこと頑張りましたね」とか「部活頑張ってたね」とか、そういうコメントを読んではったんよ。私は、執行部のことを言ってもらえる

と想ってた。執行部、すごい頑張ったから。だからワクワクした気持ちで前に出たら、全然違うことを書かれて、あんなに頑張ったのに違うこと書かれたって、その時は思っちゃったねんな。でも、大人になればなるほど分かってくるんやけど、卒業直前のタイミングで、多分職員室で話してたんやけど、英語のスピーチコンテストとかあるやん。とある友達がいて、「どうしたら一番になれるか？」って先生にリサーチしてたのを見てたんよ。野坂先生も英語の先生やから、もちろん聞きに行ってたと思うんやけど。一方、私は自分なりにベストを尽くすタイプやったんよ。たまたまいい順位になることもあれば、評価する人の好みもあるから、その中で自分はこの成績なんやなっていう結果がつくだけやと思ってる。自分のベストを尽くせば必ず結果はついてくると信じているタイプやから、そういうリサーチをして周り比べるっていうのは違うと思ってる、みたいなことをその時、野坂先生に言ってたんよ。多分それが先生の中で印象的やったみたいで、メッセージに書いてくれたんや。ニュアンス的には、「周りと比べずに自分のベストを尽くせることが素晴らしい」と書いてくれて、さらに「常に集団のレベルを引き上げてくれました」とも書いてくれてはった。学校を卒業したら文化祭や体育祭はどんどん遠くなるわけで、だからこそ当時の私はその時の頑張りを書いてもらえると嬉しかったんよ。でも、先生は私と話す中で、大人になっても自分の心の中で輝く言葉を渡してくれたんやなって思ってた、それがすごく嬉しかった。誰かと比べて勝ちたいからやってるわけじゃないし、自分が自分として誰かを癒してあげたい、いいなって思ってもらえる人でありたい、っていう気持ちを認めてもらえた言葉やったなって思った。それにすごく感謝してる。



左：語り手 中合真依さん
右：聞き手 山瀬心遙

また写真送るね。閉めましょう。
—はい。ありがとうございます。

【感想】

高校時代の生徒会執行部やシカゴでの海外研修など、自分と共通する経験があり、お話を伺うのがとても楽しかったです。考えることや挑戦、人とのつながりを大切にする姿から、日々の経験を意味あるものとして積み重ねる大切さを学びました。立命館守山という恵まれた環境で、多様な経験や挑戦の機会があることを改めて実感し、今後の学校生活でもその学びを大切にしていきたいと思います。